

受付番号

留学・研究計画書

氏名 若林 大我	留学機関名 ペルー国立 サン・アントニオ・アバド・デル・クスコ 大学
留学先国名 ペルー共和国	留学期間 西暦 2011年4月～2012年3月
研究テーマ 中央アンデス高地農村部における牧畜活動の経済的側面と象徴的側面に関する人類学的研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>現在のペルーとボリビアにあたる中央アンデス地域では、約6000年前頃からラクダ科動物を対象とする牧畜が開始された。16世紀半ばにはスペイン人の侵入によって旧大陸由来の家畜動物(ヒツジ、ウシ、ウマなど)が導入され、ラクダ科の家畜であるリヤマ及びアルパカとともに、この地域に暮らす人々にとって欠かせない生活の基盤となっている。特にリヤマとアルパカの世界全体の飼育頭数をほぼ独占するペルー南部高地やボリビア西部高地において、その飼育者のほとんどはケチュア語系及びアイマラ語系の先住民人口であり、牧畜活動を取り巻く彼らの生活様式や環境利用の方法、牧畜に関わる諸儀礼について、これまでに多くの研究が発表されてきた。</p> <p>本研究は、ペルー南部高地のクスコ県(Departamento de Cusco)中部をフィールドとして申請者がこれまでにこなしてきた研究を敷衍するものである。先住民社会における牧畜活動のより詳細な調査を通じ、その(実体的な意味での)経済的側面と、牧畜をめぐる儀礼や口承伝統に表れる象徴的側面との関係を、実証的に示すことを目的としている。</p> <p>アンデス高地において、農牧複合の形態をとる、あるいは(物々交換や貨幣を介して)農民との交易を行なうなど、何らかの形で農耕との結び付きを持たずに、純粹に牧畜のみで生計を立てている社会の例は無い。従ってこの地域で人類学的調査を行なうにあたり、牧畜に視点を置くことは、調査対象社会の生業体系全体を俯瞰するうえで有効なアプローチとなりうる。</p> <p>アンデス高地農村部における世帯ベースの牧畜活動は、まさに“社会に埋め込まれた経済”であることは勿論、儀礼や口承伝統を含む観念体系とも密接に関わっている。しかしながらこれまでのアンデスにおける人類学では、日常的な農耕労働とそれを取り巻く儀礼との関係について若干の研究例があるものの、牧畜に関しては諸儀礼の民族誌的記述や、そこに見られる象徴の意味解釈がほとんどである。アンデス高地の特殊な環境を効率的に利用する精巧な技術としての牧畜活動は、儀礼や口承伝統に表れる観念体系と決して無関係、ないしそれに従属的なのではなく、観念体系の形成に関与している、という考えに基づき、日々の牧畜に関わる労働が儀礼や口承伝統にどのように織り込まれるかを探るのが、本研究の課題である。</p> <p>近年の開発援助の方法論では援助対象社会の自立的・持続的な発展を促すことが前提となっており、アンデス高地農村部の小規模家畜飼育者に対しても単なるインフラの提供(金網製の家畜囲いや、皮膚病防除のための家畜消毒槽設置など)から、品種改良のための技術供与、あるいは獣毛を使った土産物生産の研修へと、援助計画の内容が変化しつつある。だがこうした新たな技術が当該社会に根付くためには、それが既存の牧畜に関わる労働の中に矛盾なく取り込まれ得るのか、牧畜を巡って成立している観念体系と衝突する恐れはないかについても、適切に評価されなければならない。本研究はこの問題について、ミクロな社会調査を通じてそうした評価軸のひとつを提供することを意図している。</p>	

成果報告書

記入日 2012年 4月 7日

氏名 若林 大我	留学先国名 ペルー共和国	所属機関 ペルー共和国 サン・アントニオ・アバド・デル・クスコ大学
研究テーマ：中央アンデス高地農村部における牧畜活動の経済的側面と象徴的側面に関する人類学的研究		
留学期間： 2011年 4月 ~ 2012年 3月		
<p>研究の背景</p> <p>報告者は2011年4月から2012年3月までの約1年間、南米ペルー共和国南部高地において、ヒツジやラクダ科動物を中心とした牧畜活動の、経済的側面と象徴的側面との関係を明らかにすることを目的としたフィールドワークを行なった。アンデス高地のケチュア語系ないしアイマラ語系先住民人口による牧畜文化については既に1960年代後半から人類学的調査が開始されており（注1）、これまでに様々なアプローチに基づく研究例がある。しかしながら先行研究では、牧畜にまつわる諸儀礼や口承伝統等の文化的側面と、獣毛や乳、食肉などの畜産物の生産・流通・消費に焦点を当てた経済的側面とが別々に論じられる傾向があり、あるひとつの土地で営まれている牧畜活動の全体像を、その両面から捉えようとした調査はこれまで行われていない。</p> <p>アンデス高地の先住民による世帯規模の牧畜は、まさに「社会に埋め込まれた経済」であり、生計の手段であると同時に、彼らの信仰や世界観が顕現／行為される場でもある。だとすれば、ひとつの社会における日常的な牧畜労働と、牧畜を取り巻く様々な儀礼や口承伝統とを並行して調査することで、その両者を別個のものとしてでなく、互いに密接な関連を持ったものとして描けるのではないか。</p> <p>こうした問題意識に基づき報告者は2004年から2009年にかけて、ペルー南部高地のクスコ県（Departamento de Cusco）中部に位置する先住民共同体パンパリャクタ・アルタ（Comunidad Campesina de Pampallacta Alta）において、延べ5回にわたるフィールドワークを実施してきた。ただしこの先住民共同体は牧畜と同時に塊茎類を中心とした農耕も行う農牧複合社会であり、調査データを相対化しアンデス高地牧畜に関するより一般的な知見を得るためには、農耕を全く、あるいはほとんど行わない、より高標高地帯に位置する別のフィールドでの比較調査が必要であった。</p> <p>以上のような経緯から2010年度の松下国際スカラシップによる助成を受け、2011年4月から1年間にわたる新たなフィールドワークを行った。</p> <p>調査地の選定</p> <p>上記の理由から今回のフィールドワークは、先住民共同体パンパリャクタ・アルタより更に高標高、少なくとも全域が標高4000mを超え、大規模な農耕が不可能な地域で実施する必要があった。また報告者は先住民社会で長期の住み込み調査をする都合上、パンパリャクタ・アルタでのフィールドワーク以前にケチュア語を習得したが、ケチュア語は方言の差が激しい言語であるため、同じペルー南部高地でもクスコ県を外れると、新たにその土地のケチュア語方言を学ばなければならない可能性があった。</p> <p>こうしたことから調査候補地として、同じクスコ県内でもより南寄りの、現地でも「高標高地域（Provincias Altas）」と呼ばれる地帯、特に大きな湖があり、広い牧草地が存在すると思われるカンチス郡（Provincia de Canchis）やカナナス郡（Provincia de Canas）を想定し、2011年4月上旬にペルー渡航後速やかにクスコ県へ移動して、調査地の選定作業を開始した。</p> <p>クスコ県庁内でラクダ科家畜（アルパカ（<i>Vicugna pacos</i>）、リヤマ（<i>Lama glama</i>））の改良や流通改善、野生のラクダ科動物であるビクーニャ（<i>Vicugna vicugna</i>）の毛の利用を推進するプロジェクトなどを行っている「クスコ県南米ラクダ科動物特別プロジェクト（Proyecto Especial Regional de Camélidos Sudamericanos: PERCSA）」のスタッフ、及び報告者の受入機関であるサン・アントニオ・アバド・デル・クスコ大学（Universidad Nacional San Antonio Abad del</p>		

Cusco) の人類学者ヘスス・ワシントン・ロサス・アルバレス (Jesús Washington Rozas Álvarez) 教授の協力を仰ぎつつ、約 1 カ月間カンチス郡及びカナス郡のいくつかの先住民共同体を訪問し、各地の自然環境や生業形態、飼育家畜構成等を見て回った。

その結果、A) 家畜 (特にアルパカ) の改良があまり進んでおらず、飼育が世帯単位の小規模なものに留まり、旧来の儀礼や口承伝統等が現存していると期待できること、B) 隣接する地域でいくつかの先行研究があり、本調査のデータとの比較が可能であること、C) 標高が高いため主生業が牧畜であるが、パンパリヤクタ・アルタに似て山がちな切り立った地形を呈し、純粹に生業形態の違いを軸として 2 つの社会を比較できること、D) 自動車の往来は頻繁ではないものの、最近になって領域内まで未舗装の道路が通じ、アクセスが比較的容易であること、などの理由から、先住民共同体チリュカ (Comunidad Campesina de Chillca) を調査地を選び、2011 年 5 月下旬から住み込みの調査を開始した。

調査地の概要

チリュカは、クスコ県南東部のカンチス郡北端、ピトゥマルカ行政区 (Distrito de Pitumarca) 内に位置する先住民共同体である (図 1 参照)。領域の標高は 4235m から 6372m におよび、領域総面積は約 10,636ha である。領域内の最高標高 6372m は、ペルー国内で 5 番目に高く、クスコ県内の最高峰としても有名な雪山アウサンガテ (Auzangate) の頂上にあたり、共同体の領域全体がその南麓および東麓に位置する。

“Comunidad Campesina” とはペルーにおける行政・土地単位のひとつであり、その内部では先住民人口によるある程度の自治権、土地の共有権が認められている。1960 年代末からのフアン・ベラスコ・アルバラド (Juan Velasco Alvarado) 左派軍事政権時代 (1968-75 年) に、元々 “Comunidad Indígena” であった名称が “Comunidad Campesina” と改められた。“Comunidad Campesina” は直訳すれば「農村共同体」ないし「農民共同体」となるが、この訳語では「生業として農耕 (のみ) を行っている共同体」という誤解を招きやすいため、本稿では “Comunidad Indígena” の訳である「先住民共同体」を用いる。

クスコ県をはじめとするペルー南部高地では先住民人口が多く、従って先住民共同体も多数存在するが、チリュカも領域の境界全てを他の先住民共同体に囲まれている。領域内の空白部分は、南西隣に位置する先住民共同体パンパチリ (Pampachiri) の支村 (anexo) となっている。領域は 9 つのセクター、すなわちアルカタウリ (Alcatauri: 以下 AL と略記)、アンタパララ (Antaparara: 同 AN)、チリュカ (Chillca: 同 CH)、チンパチリュカ (Chimpachilla: CC)、フチュイ・ピナヤ (Huchuy Phinaya: 同 HP)、カンパ (Khampa: 同 KH)、ケソ・ユノ (Qeso Yuno: 同 QY)、キリタ (Quillita: 同 QU)、ウユニ (Uyuni: 同 UY)、およびひとつの支村モリョビリ (Molloviri: 同 MO) に区分されており、このうち CH の低部に中心集落が存在する。共同体単位での正確な人口統計は無いが、恒常的に共同体に居住する老人や子供を含んだ総人口は約 300 人と推定され (注 3)、出稼ぎ等で共同体外へ出て行く機会の多い若者を除くと、ほとんどの住民がケチュア語モノリンガルである。

領域内には北東から南西に向かってチリュカマユ川 (Río Chillcamayu)、北西から南東に向かってアルカタウリ川 (Quebrada Alcatauri) という 2 本の大きな川が流れており、両者は CH と QY の境界あたりで合流し、ピトゥマルカ川 (Río Pitumarca) と名前を変えて、ピトゥマルカ行政区の役場があるピトゥマルカの町へ下っていく。ピトゥマルカの町からは、アマゾン水系の源流のひとつであるビルカノタ川 (Río Vilcanota) 沿いに位置するチェカクペ (Checacupe) の町まで舗装道路が伸びているが、ピトゥマルカからチリュカまでの道路は上述のように未舗装で、ようやく 2007 年に建設されたものである。ピトゥマルカからチリュカまでの道路は上述のように未舗装で、ようやく 2007 年に建設されたものである。ピトゥマルカからチリュカまでの道路は上述のように未舗装で、ようやく 2007 年に建設されたものである。ピトゥマルカからチリュカまでの道路は上述のように未舗装で、ようやく 2007 年に建設されたものである。

9 つの区域のうち、標高の低い QY、CH、CC の一部では、主に川沿いの斜面でジャガイモが栽培されている。一年を通じて寒冷なこの土地では、寒さへの耐性があるジャガイモが唯一の作物であるが、聞き取りによると 20 世紀半ばまでは現在よりも格段に寒かったため、ジャガイモすら育たなかったという。ジャガイモは灌漑によらず天水で栽培できるが、ひとつの畑での連作が不可能な作物であり、アンデス高地では耕地をいくつかの区画に分け、これを毎年ローテーションさせて栽培する慣行が非常に広く見られる。チリュカも例外ではなく、ローテーションのサイクルに応じて耕地全体が 4 つから 7 つの区画に分けられている。もともと広くはない可耕地を更に分割して耕作に充てているためジャガイモの生産量は限られ、各世帯の消費分がかるうじて賄えるほどである。

従ってチリュカに暮らす人々の主たる収入源はアルパカ、リヤマ、ヒツジを中心とした牧畜から得られる畜産物で、特に商品価値の高いアルパカ毛は各世帯にとって不可欠の生活基盤となっている。

調査方法と結果の概要

報告者は、CH に住むある共同体成員の家庭に同居させてもらい調査を進めた。主な作業項目は、1) 可能な限り

共同体内の全世帯を訪問し、自作のフォーマットに従って親族関係、飼育家畜の種別・性別頭数、利用している放牧地、各種家畜の飼育目的、獣毛の販売状況等を質問する「牧畜センサス」、2) 1)と並行した、各世帯の住居の3次元位置情報のGPS端末による記録、3) 同居した世帯における日常的な牧畜労働(各日の放牧場所、放牧担当者、毛刈りや疾病治療の作業等)の観察と記録、4) 時折行われる儀礼の観察と記録、5) 牧畜と関連する、及び人間の自己規定に関連する口承伝統(民話、広く流布している噂話の類、創世を説明する語り等を含む)の採話、の5点である。1)と2)はチリユカ全域における牧畜活動の全体像を概観すること、3)は1)で得られた量的データをより詳細な直接観察によって補うこと、4)と5)はチリユカの牧畜活動の経済的側面のみならず文化的側面も視野に入れることをそれぞれ目的としている。

共同体での住み込み調査を進めつつ、日本との連絡やデータの吐き出しおよび保存、ワシントン・ロサス教授との調査に関する話し合いのため、毎月1度クスコ市に下りた。

調査終了時まで計74世帯(全体の約86%(注4))からの牧畜センサスの回答を得、159の住居の位置情報を記録、また大小35件のインタビューや採話を行うことができた。

調査結果の概略

GPS端末で記録した住居の3次元位置情報を数値地図上にプロットしたものを図1に示す。

ペルー高地部の1年は、4月から11月頃までの乾季と12月から3月頃までの雨季に分けることができる。乾季は南半球の冬にあたるのでより気温が低いが、チリユカのような高標高地域は1年を通じて寒冷で、雨季でも降水はほとんどの場合雪や雹の形をとる。チリユカの各セクターに暮らす世帯の大半は、雨季と乾季で住む場所を換え、家畜が牧草を食べ尽くしてしまわないよう配慮しつつ、各時期の放牧地を確保している。このため各世帯は、倉庫や家畜囲い、台所と寝室を兼ねた部屋等を備えた主住居(写真1)の他に、主住居よりもひとまわり小さな台所兼寝室の1棟に、石積みの家畜囲いが付属しただけの季節的住居(ケチュア語で *astana* と呼ばれる、写真2)をひとつないし複数持っているのが普通である。住居の位置情報の記録件数が牧畜センサスの回答数の2倍以上もあるのは、まさにこの理由によるものである。主住居と季節的住居の区別は、チリユカの人々自身によって明確に意識されているが、乾季と雨季のどちらで季節的住居を利用するかはセクターによって異なる。図1でプロットされている点のうち、赤は主住居を、白は季節的住居を示す。

また牧畜センサスで得られたデータのうち、種別の総家畜頭数をセクターごとにまとめたものを図2に、更に総家畜頭数を各セクターの世帯数で割ったものを図3に示す。チリユカで飼育されている牧畜家畜は、リヤマ、アルパカ、ヒツジ、ウマ、ロバあるいはラバ(ロバとラバは飼育者自身によってもはっきりと区別されていないため、牧畜センサスでも一括して記録)の5種のみである(注5)。このうち最も少ないのはロバ/ラバであり、1頭も飼われていないセクターが多く見られる。逆に最も多い家畜はアルパカで、CHでは総頭数が1000を超えていることが分かる。ただし世帯平均で見ると、中心集落が位置し世帯数が多いCHはあまり目立たず、QU、KH、AN、HPなどでアルパカの平均所有頭数が100を超える。丈の低いイネ科の牧草を好むリヤマと比べ、アルパカは河川や湖周辺に形成する湿地帯に生える、柔らかく水分の多い牧草を好むため、水場の多いこれらのセクターにおいては特にアルパカの支持力が高いものと考えられる(注6)。

牧畜センサスの質問項目のひとつ「各種家畜の飼育目的」では、家畜種別に、その家畜の飼育目的を思いつく限り、また回答者自身が重要と考える順に挙げてもらい記録した。「最も重要な飼育目的」のレベルでは、アルパカは「毛の販売」、リヤマおよびロバ/ラバは「物資の運搬」、ヒツジは「肉の販売」、ウマは「乗用」という回答がそれぞれ最多であった。ひとつの家畜種につき最大で6つの飼育目的が挙げられたが、紙幅の都合上、飼育目的や獣毛の販売状況、牧草地の利用形態、親族関係と居住形態との関連等については別稿で詳述することとしたい。

また牧畜に関連した主な儀礼としては、2011年6月にヒツジの繁殖儀礼(*ovejuna ch'uyay*)、8月に地母神への供物儀礼(*pago a la pachamama*)および荷駄獣として活躍するオスのリヤマをねぎらう儀礼(*machu t'ikachiy*)、12月に粘土で家畜を造形する儀礼(*pastor llut'ay*)、2012年2月にアルパカとリヤマの繁殖儀礼(*uywa ch'uyay*)を観察することができた。

口承伝統については、チリユカの生業の経済的・生態学的側面が、単に牧畜を取り巻く儀礼のみならずより一般的な世界観の形成にも関与している可能性があるという仮説のもと、「人間」あるいは「我々」という概念を彼らがどう定義しているかを示す話に焦点を絞って採話を行った。アンデス先住民にとって牧畜という生業は、地母神(*pachamama*)や山に宿る神格(*apu*あるいは*pukara*)との関係の中で、人間=我々が自然環境を利用し、同じく他者である家畜群を維持しながら、その余剰物を得ることに他ならない。そうであれば、人間=我々とは何であるかという意味付けが、日々の牧畜労働を媒体として不断に定義されている、ないし再生産されていることが十分考えられる。

「人間とは何か」という定義は、「人間ならぬものは何か」という定義と表裏一体であるので、今回の調査では様々な「人間ではない存在」についての語りを採集した。聞き取ることができた主な話としては、悪魔 (Satanás) が住むと信じられているブエノス・アイレス (Buenos Aires) という町 (アルゼンチンのブエノス・アイレス市とは別の場所と考えられている) に迷い込んだ人の話、悪魔あるいは水場に棲む精霊 (sirena) と契約を交わして音楽の才能を得たハーブ弾きの話、近親相姦を犯したため死後もその魂がこの世を彷徨うようになった人の話、現在の人間が地上に現れる以前、まだ太陽が無かった時代に暮らしていた人々 (ch'ullpa machu あるいは soq'a machu) の話、アウサンガテ山の地下にあるという、悪人の魂が閉じ込められる牢獄の話等が挙げられる。こうした口承伝統には明らかにキリスト教的思想が色濃く反映されているものの、アンデス地域では既にキリスト教が土着文化の一部として種々の改変・歪曲を経ており、分析の材料として大変興味深いものである。

儀礼や口承伝統のデータについては、調査終了後間もないため整理が未了であり、牧畜センサスなどで得られた家畜飼育・利用の経済的・生態学的データとの具体的な関連は今後の分析課題である。

留学の感想

今回の留学で最も強く感じたのは、アンデス高地農村部における近年の変化の激しさだった。

ピトゥマルカの町から伸びる舗装道路は 2007 年にチリュカの境域まで延長されたが、報告者が調査中だった 2011 年の後半になり、チリュカから北隣のクスピカンチ郡 (Provincia de Quispicanchi) に向けて別の道路を建設する計画が持ち上がった。計画を提案したのはチリュカの住民たち自身であり、カンチス郡のみならずクスピカンチ郡のウルコス (Urcos) やオコンガテ (Ocongate) といった町からもアルパカ毛の買い付け商人がチリュカに来やすくなることで、買い付け競争によって価格が向上することを期待したものである。郡境をまたがる道路となるため、クスピカンチ郡に位置する先住民共同体や郡庁との交渉が必要であるが、計画は既に大筋で合意されており、ピトゥマルカ行政区の予算で、早ければ来年 (2013 年) から着工の見通しである。

聞き取りによると、現在ほど道路網が発達していなかった 1998 年か 1999 年まで、チリュカではリヤマを用いた物資交換の旅が毎年行われていた。獣毛製のロープや荷袋、肉等の畜産物を積み、アウサンガテ山のはるか北方にあるクスコ県パウカルタンボ郡 (Provincia de Paucartambo) まで 10 日ほど歩いて、トウモロコシやココアの葉等と物々交換していたという。クスコ県の南にあるアレキパ県 (Departamento de Arequipa) からチリュカに同様のリヤマのキャラバンが来て、チリュカで作られる凍結乾燥処理をして保存食としたジャガイモ (チュニョ (ch'uño)) を入手していたらしい。道路の整備、物流の改善、貨幣経済の浸透とともにこれらの慣習は徐々に失われ、今や彼ら自身がアルパカ毛価格の向上のため、戦略的に新たな道路の建設を提案するまでになっている。

更に 2012 年に入り、チリュカの中心集落に発電用のダムを建設するプロジェクトが持ち上がった。プロジェクトを主導したのはプカラ発電 (Empresa de Generación Eléctrica Pucara S.A.: EGEPSA) という電力会社で、ビルカノタ川沿いの町に電気を売りつつ、チリュカでダムの建設・維持のための雇用を創出する、という名目だったが、中心集落を始めとするいくつかの集落や、チリュカマユ川沿いの良質な牧草地の多くが水没することになるため、村民集会で慎重な検討が重ねられた。最終的にリスクが高すぎるという結論になり、2 月末に正式にプロジェクトは却下されることとなったが、外部からの急激な変化の波に晒されている現在の先住民共同体の姿を象徴するような出来事だった。

勿論先住民共同体自体が、決して一枚岩の社会ではない。アルパカを多く所有する裕福な世帯もあれば、共同体内ではほとんど生活の見通しが立たず、熱帯雨林地域まで金採掘の出稼ぎに行く人もいる。実際、牧草地を含む共同体内の土地は共有・共用であるため、放牧によってより多くの利益を得るのは家畜を多く飼っている世帯であり、「共同労働 (faena) など共同体の仕組み自体が、裕福な人ばかりに有利に働くようになっている」といった不満も若い村人から耳にすることがあった。

とはいえチリュカの人々は、見ず知らずの外国人人類学者である報告者にもとても親切で、1 年もの間同居させて欲しいという依頼も快く引き受けてくれた。牧畜センサスや採話のため領域内を歩き回っていた際も、至るところで食事をご馳走してくれるので、時には歩くのが困難なほどだった。報告者が村を後にする前日の晩には皆でビール (普段は純粋アルコールを水で希釈したものを飲むので、ビールは一種の贅沢品である) を酌み交わし、踊って、何人もの人が涙してくれた。彼らは報告者にとってインフォーマントである以前に、得がたい友人だった。

クスコ市では 2011 年 9 月に、アンデスをフィールドとするペルー人類学者たちが毎年開催している研究会があり、報告者もそこでこれまでの研究成果について発表する機会を得た。発表内容はスペイン語で論文にまとめ、今年 6 月に出版される予定である。このように研究上でも、現地の人々との触れ合いという意味でも、非常に中身の濃い留学ができたと感じている。最後になりますが松下山幸之助記念財団の関係各位には、貴重な機会を与えて下さったことに深く感謝しております。1 年間本当にありがとうございました。

注 1: FLORES OCHOA, J. A., 1968, Pastores de Paratía: Una Introducción a su Estudio, México.

注 2: SENDÓN, P. F., 2003, “Cambio y continuidad en las formas de organización social de las poblaciones rurales del sur peruano: El caso de la Comunidad Campesina de Phinaya”, *Debate Agrario* 36: 1-13, SENDÓN, P. F., 2004, “Phinaya: Cambio y Continuidad en una Comunidad Andina (Cuadrenos MacArthur 4)”, Lima: Editorial UNMSM, RICARD LANATA, X., 2007, *Ladrones de Sombra: El Universo Religioso de los Pastores del Ausangate*, Lima: Instituto Francés de Estudios Andinos など。

注 3: 共同体単位での正確な人口統計は存在しないため、この数字は共同体成員からの聞き取りに基づく。

注 4: 2010 年末に行われた、共同体の自治委員会 (Junta Directiva) 役員選挙 (2 年ごとに実施) 記録に添付された選挙人名簿に基づき計算。

注 5: 広義の家畜としてはこの他、夜間家畜を捕食者から守るためのイヌ、愛玩動物としてのネコ、食用のテンジクネズミ (*Cavia tschudii*) とニワトリも飼われているが、いずれも放牧労働によらず個別に給餌される動物であるため、牧畜センサスの対象とはしなかった。

注 6: チリユカでは各世帯が所有するアルパカ群の他、共同体運営資金の調達のため飼育されている共有のアルパカが約 2800 頭おり、これらは MO を除く全セクターに割り当てられ、各セクター内の世帯が毎年交代で飼育にあたっている。

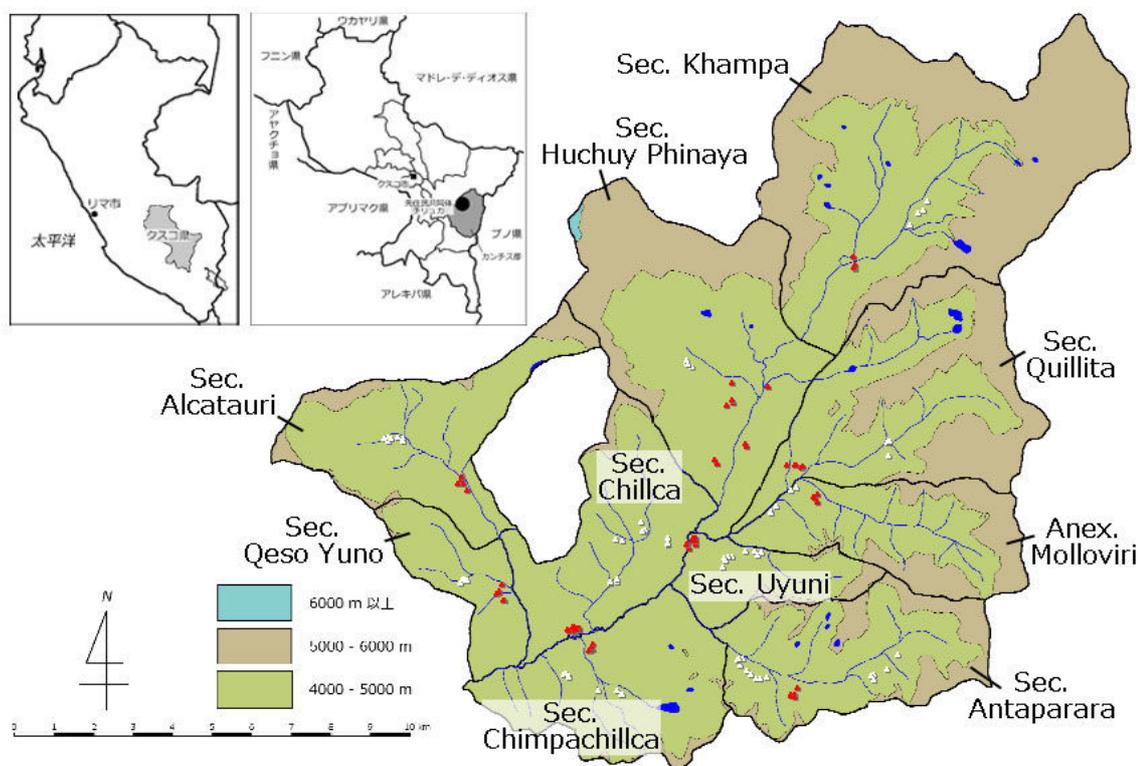


図 1: 先住民共同体チリユカの領域 (ペルー国土地理院発行の 10 万分の 1 地図を元に作成)



写真 1: 主住居の例



写真 2: 季節的住居の台所兼寝室

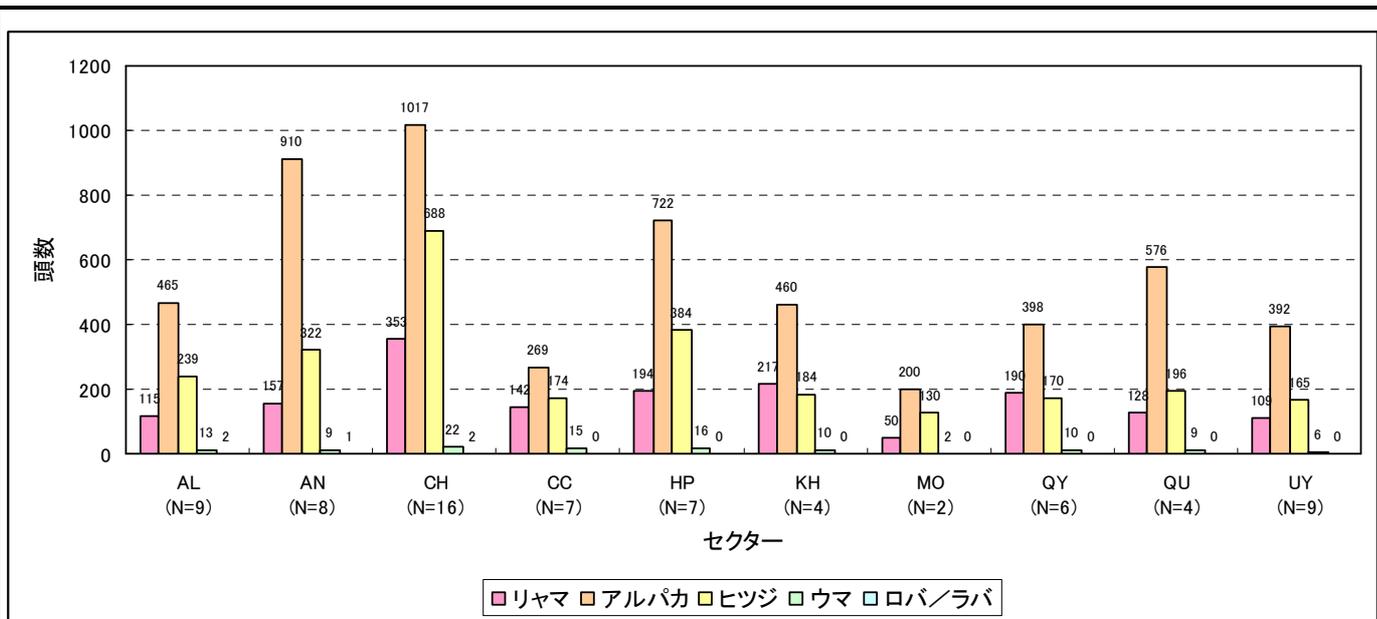


図 2: 各セクターの種別総家畜数比較 (N=サンプル世帯数)

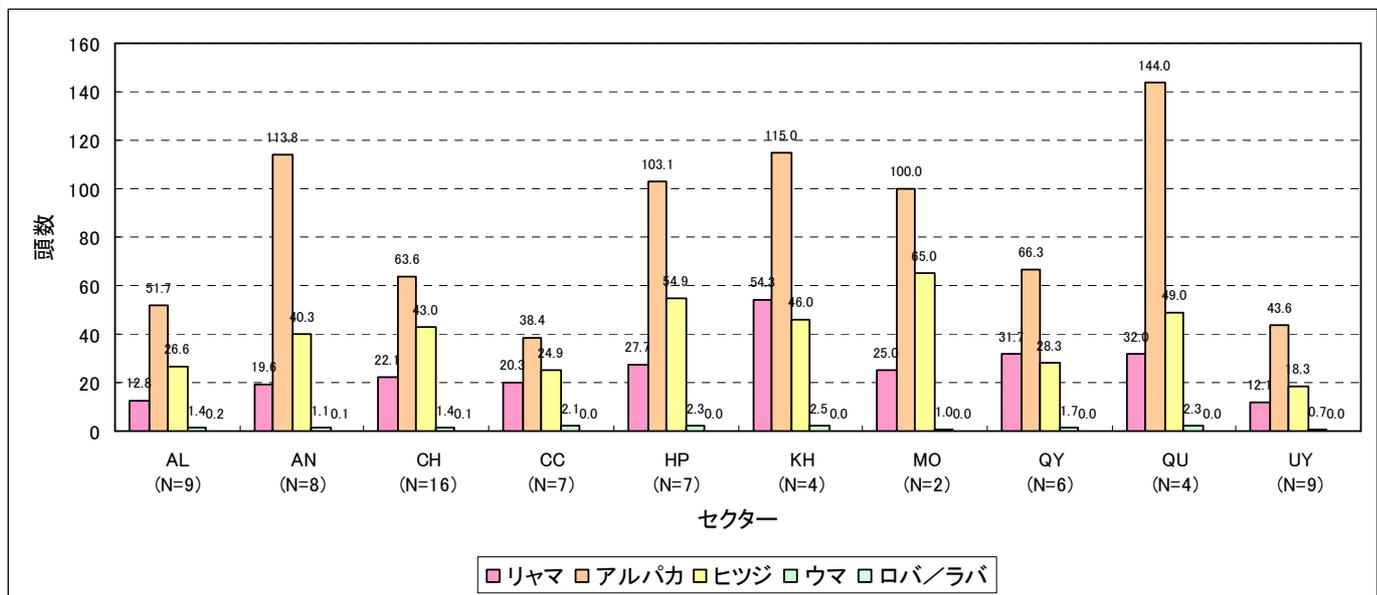


図 3: 各セクターの1世帯あたり種別平均家畜数 (N=サンプル世帯数)



アルパカの毛刈り



チリュカの人々との記念撮影